



さわやか



活気と潤いのある活力ある学校！

私は、塩川小学校の校長として、「活力ある学校」づくりを通して、まずは、“子どもが育ち、伸びる”喜多方で一番の学校にしたいと考えています。

では、「活力ある学校」とは、どんな学校なのでしょう？

たぶん、人それぞれに違うでしょう。日本人的に、イメージや印象で語ることが、実は、「やってるつもり」(前石田校長先生)で満足していて、具体的な姿や方策を共通理解しているかという、そこまでには至っていません。

今日の終業式は、式として、実に有意義な時間となりました。

二学期の反省を行った暖己くんは、何度も繰り返し練習したのでしょう。緊張の度合いからもそれはわかりました。そして見事にノー原稿で発表しました。彼の努力と発表の素晴らしさは、他の子にも伝わり、称賛の拍手はいつまでも続きました。

私は、そこに「活力ある学校」の一端を見た想いがしました。

「活力ある学校」とは、子どもが目的を持って活動する場があって、子どもが変わる・伸びる・成長する場がある学校。よさや頑張りを認め合う仲間がいる学校で、子どもが変わるきっかけをしっかりと保障する教師がいる学校。私は、そういう学校なのだと考え、そんな学校づくりをしています。



立派な発表に鳴り止まない拍手！

「がんばって」「きちんと」「しっかり」「気をつける」といった精神的な対策が多く出てきます。原因を考えたり、方策を考えたりすることよりも、気持ちをしっかりとするという答えが多く、それまで学習した計算の意味やそのきまりをもとにした考えがなかなか出てきません。

しかし、そこでハッとさせられます。「がんばって」「きちんと」「しっかり」「まじめに・真剣に」「気をつけて」という言葉を、日頃私たち自身が子どもたちに投げかけているのではないかと。

心構えや態度を育て、磨くことはもちろん大切なことです。ただ、精神的な訓話ばかりでは、物事を論理的に考え、いろいろな問題をよりよく解決するという力は育っていきません。

勉強だけでなく、毎日の生活の中でのいろいろな悩みや問題について、「どうしてか」「どうしたいか」「そのためにどうすればいいか」考える機会を、学年相応にしていきたいものです。、どうでしょう！？

第二小学校学校便りより

悪戯の肯定的意図を理解する。

子どもは、人は、誰しもよくなりたいと思っています。子どもは、いろんな悪戯(いたずら)をしますが、それは、叱られたくてしているわけではありません。多くは、自分への関心を高めたいがために、無意識に行っている行為なのです(悪戯の肯定的意図)。ただ、関心を持ってもらうための正しい行為がわからないだけなのです。

「できない子をできるようにするのが教師の使命だ。」

「できない子を怒るのは、教師ではない。怒るフ口をめざすのか？ほめるフ口をめざすのか？」

子どもを叱ってよくしようというのは、よい教育とは言えません。それは、一時的によくなっているだけからです。叱ることで、その子の資質・能力は何も身に付かないからです。教師なら、同じ間違いを起こさないために身に付けるべき資質・能力を、子どもに考えさせ、活動させて身に付けるのがプロ教師です。



成すことによって学ぶ

また、子どもを怒るのは、感情的になった教師のエゴを通すためにすることだからです。そして、子どもを怒る第一の理由は、子どもの「悪戯の肯定的意図」を理解していないからです。

子どもを伸ばしたいならば、「精神的な訓話」ではなく、子どもを活動させて、新たな考え方や肯定的な感動を持たせましょう。